

序

本書は平成二年の十一月に発表された。それからもう五年が過ぎていくが、こうした類いの記録は、古びるということがないばかりか、ますます光彩を放っていくように思われる。一般に普及することはないとしても、その価値を減ずることとはないのであるまいか。「根元への道」シリーズは、神人共同で演じられたドラマを、人間サイドから記録したものである。ドラマ編と解説編に分かれているが、解説編は独立した内容のものなので単独で読んでも不都合はないが、ドラマ編のほうは前後のつながりがあるので、第一幕目の「日本の神々」を読んでいないと、多少わかりづらい所があるので、第一幕目の「日本の神々」を読んでいないと、多少わかりづらい所があるのではないかと思われる。

ドラマ編は、まず最初に神界劇第一幕目として「日本の神々」が書かれ、続いて幕前編の「道を求めて」が書かれた。これは神界劇を演ずることになった一人の人間の記録であって、神界劇の前段階にあたるものである。それは神界の役目を勤めるようになるまでの人間の成長の記録であって、必ずしも神界劇の展開に不可欠な著書ではない。そのため今回はそれを後回しにして、第二幕目の本書を先に出すことにした。

神界劇は神人共同の三つの神行で構成されている。第一幕は白山神行、第二幕

は国常立^{くにとこたち}神行、第三幕は大国主^{おおくにぬし}神行である。本書は国常立神行が演じられた場面だが、その舞台は、人間には珍しい子供の神々との不思議な交流とともに展開されていく。劇とは言っても、本シリーズのすべては事実を基にした真実の記録であるが、この内容をそのまま受け入れることは、多くの人たちにとっては難しいと思われる。しかし、異次元は確実に存在しているし、その異次元に神々が住んでいる領域があるのも事実だし、その神々と交流できる人間がいることもまた事実である。

人間世界の大きな節目には、神人共同の仕組が過去にも演じられてきたが、二十世紀末の現代でもそうした仕組が計画されて、それが世界の縮図である日本ではひそかに演じられた。三幕からなる神界劇はすでに終わっているが、その後の仕組はさらに大きく発展して、今も進行中である。その内容は人間にはさらに信じがたいものなのだが、宇宙世界にまでも人間が深くかかわることになった驚異的なものである。SFやファンタジーならいざ知らず、生の人間が空想小説まがいのことを現実にやったとしても、あまり信用されないものなのだろうが、いずれそれも幕後編として発表するつもりである。